

# 目標の進捗状況報告書

(2012年度・大学)

担当部局は   ☆印の箇所を記入してください。

## I. 評価項目・要素と担当部局

本シートでの自己点検・評価を行う部局と項目・要素は次のとおりである。

対象部局	経済学研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.2 教育課程・教育内容
小項目	6.2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。
要素	必要な授業科目の開設状況 順次性のある授業科目の体系的配置 専門教育・教養教育の位置づけ (学部) - コースワークとリサーチワークのバランス (院)
小項目	6.2.2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。
要素	学士課程教育に相応しい教育内容の提供 (学部) - 初年次教育・高大連携に配慮した教育内容 (学部) - 専門分野の高度化に対応した教育内容の提供 (院) 理論と実務との架橋を図る教育内容の提供 (専院)

## II. 目標の進捗評価と進捗状況報告(2012.4.30現在の進捗状況報告)

### 《進捗評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況の自己評価を行っている。

進捗評価はA、B、C、Dの4段階とし、2012年4月30日現在における目標の達成度評価(2013年度の達成に対してどこまで進んだかの評価)を行った。

A、B、C、D評価は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 2009年4月に「本研究科運用内規」に設定し、院生には「履修心得」で公表した課程博士学位取得プロセスに基づき、博士課程後期課程修了までの5年間で博士学位を取得させるように指導体制を強化する。	→博士課程後期課程修了までの5年間で博士学位申請者数、取得者数。	B	B	B		
2. 受講希望院生の需要に応じて、マクロ・ミクロ計量分析の講義・演習を弾力的に「特殊講義」「特殊演習」で開講可能できるように、大学に必要な予算措置を要求して(PC、更新も含むソフトウェア等の整備)物理的体制を確保し、後期課程へ進学する研究者養成のみならず、前期課程における高度職業人へのデータ分析の演習教育を強化する。	→出口の需要や院生の研究テーマや将来の進路希望に応じ、大学から必要な予算措置を伴う物理的体制整備が得られれば、選択必修科目化し、そのうえでのマクロ・ミクロ計量分析の講義・演習科目開講数、受講者数。	B	B	B		
3. 研究者養成については、大学院生の研究活動支援の強化と国内外の他大学大学院生との連携教育プログラム(他大学大学院との単位互換協定の締結や現行では授業科目化されていない「経済学ワークショップ」の授業科目化)により、実質化する。エコノミストコースについては本学他研究科との連携により、カリキュラム・プログラムを段階的に再編する。	→他大学大学院との単位互換協定の締結。「経済学ワークショップ」など「セミナー、ワークショップ」の授業単位化。	B	B	B		

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

## 《進捗状況》

目標の進捗状況について次のとおり簡単に説明する。

目標1	課程博士学位取得プロセスに基づき、博士課程後期課程修了までの5年間で博士学位を取得した者1名（2009年度博士課程後期課程入学者2名のうち1名）が修了した。
目標2	大きな進捗はなしである。経済統計や計量分析など、データや数量的手法を駆使した客観的な分析能力を備えた者の育成は、アドミッション・ポリシーにも記載されており、2012年度中にその他の育成目標とともに、大学院教育部会での検討が必要である。
目標3	経済学ワークショップの授業化(単位化)により後期課程生2名が指導教員および外部の指導教員のもとで実施し、成果をおさめた。昼夜開講制度、社会人向けとしながら希望者が大きく減少してきているエコノミスト・コースについては抜本的な検討を開始した。
備考	